

第368回研究報告会（2024年6月17日）
「作家・室井光広（1955～2019）の芥川賞受賞作品と寄贈
自筆原稿について」

金子 昭

先頃、作家の故室井光広氏のご遺族より、貴重な自筆原稿を含む書籍等の寄贈を受けた。現在、その整理と目録作成を進めている。今回の研究報告会では、標記の内容で報告を行った。

室井光広は、1988年、33歳の時に「零の力 J.L.ボルヘスをめぐる断章」で第31回群像新人文学賞（評論部門）を受賞し、1994年、39歳の時に「おどるでく」（『群像』4月号）により第111回芥川賞を受賞した。室井氏は学生時代からデンマーク語の自習を始め、キルケゴー研究の第一人者である大谷愛人慶應義塾大学教授（1924～2018）の講義を受講し、卒業後も大谷教授の大部の研究書を読み続けた。大谷教授のキルケゴー関係蔵書は一括して天理図書館に寄贈されて、私が整理に当たっている。室井氏と交流が始まったのもこの関連からであったが、惜しくも2019年に64歳で病逝された。

室井光広は、世界文学を幅広く涉獵し、その蘊蓄に基づいて、どの現代日本の作家にも類例を見ない独特な文学世界を築いた。室井氏に影響を与えた主な作家としては、カフカ、ボルヘス、ジョイス、ブルーストなどがいる。芥川賞受賞作品「おどるでく」の中にも、彼らの影響を見て取ることができる。おどるでくとは、カフカの掌編「父の気がかり」に登場するオドラデク（Odradek）に踊る木偶をかけた言葉だ。室井氏は、ここで東北地方の土俗性を世界文学に接続させている。

「おどるでく」は、「私」が東北の実家で発見した“仮名書露文”の「ロシア字日記」を読み解きながら、その関係者たちとの交流を描く物語である。この奇妙な日記に綴られたロシア文字が踊る木偶のように見えることから、「おどるでく」という名前がついた。カフカのオドラデクが「忘却された物たちが取る形態」（ベンヤミン）であるように、おどるでくもまた記憶されない無用者であり、暗い部屋の隅にうごめくスマッコワラン（座敷童）に似ているという。それは「ロシア字日記」を書いた仮名書露文の姿であり、この物語を紡ぐ「私」の姿でもある。おどるでくは一種の「隠れ蓑」のようなもので、その中で意味や文脈が紡ぎ出されていく。室井光広は、何を書くかということをさることながら、どのように書くかということを意識した作家である。「おどるでく」の読者は、ボルヘスを思わせる言葉とイメージの迷宮に入り込んだ気分になるだろう（室井光広は「日本のボルヘス」と評されることもある）。

室井光広は東日本大震災を機に商業的文学誌に書くことを止

め、自ら『てんでんこ』という文学誌を主宰し、“一号一会”的つもりで幾人かの書き手とともに自作を発表するようになった。また自ら「ノート作家」を任じ、大学ノート100冊近くに様々な文学的記録を残した（これは膨大な哲学的・宗教的省察を日誌という形で残したキルケゴーに習ったものである）。そのようなわけで、室井光広の未発表／未定稿類は少なくない。寄贈を受けた自筆原稿の中にも「言霊集」という大部の自筆原稿暫定稿が存在する。内容はシナリオ、詩、小説、エッセー、評論などからなるが、こうした分類は暫定的なもので、実際にはこれらを相互に越境しているのである。

2024年度公開教学講座のご案内 — 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（10） —

2024年度の公開教学講座は、以下の日程でオンライン配信いたします。

第1回 6月 井上昭洋所長
172話「前生のさんげ」

第2回 7月 澤井真研究員
114話「よう苦労して来た」

第3回 9月 岡田正彦研究員
135話「皆丸い心で」

第4回 10月 八木三郎研究員
36話「定めた心」

第5回 11月 森洋明研究員
85話「子供には重荷」

第6回 1月 中西光一研究員
144話「天に届く理」

グローカル天理
第25巻 第8号（通巻296号）

2024年（令和6年）8月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭洋
編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

おやさと研究所（HP）



印刷 天理時報社
Printed in Japan